

静寂の声

上巻

乃木希典夫妻の生涯

渡辺淳一



渡辺淳一

静寂しじまの声こえ
下卷

乃木希典夫妻の生涯

江赤工業学院図書館
蔵書章

静寂の声 下巻

—— 乃木希典夫妻の生涯 ——

著者 渡辺淳一

定価 一二〇〇円

一九八八年四月十五日 第一刷
一九八八年七月二十日 第六刷

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三の二三

電話 〇三(三六五)二二二一

印刷所 精興社
付物印刷 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

目次

旅順地図	あとがき	第八章 永別	第七章 春秋	第六章 風雪	第五章 死闘	第四章 悲報
361	352	276	193	165	62	5

静寂の声

——乃木希典夫妻の生涯——

下巻

装画・片岡球子
A D ・坂田政則

第四章 悲 報

明治三十四年（一九〇一年）六月、希典の休職の一カ月後、第一次桂内閣が成立した。

かつて長州奇兵隊の仲間であった桂太郎は総理大臣という頂点に登りつめ、希典は休職して那須野へ隠棲する。この瞬間、二人のあいだは大きく開いたが、終始、桂とそりの合わなかった希典としては、むしろ時宜を得た退役ともいえた。

だが日本を含めた東洋の情勢は、日増しに緊迫の度をましていた。

桂は組閣の拝命を受けるや、ただちに北京にあって北清事変の事後処理をしていた小村寿太郎を召喚し、外務大臣に任じた。

このころ政界上層部には、対露柔軟派と対露強硬派の二つの流れがあった。前者は伊藤博文を中心とした一派で、満州はロシアに任せ日本は朝鮮の経営に専念し、「満鮮交換」の基本方針によりロシアと妥協をはかるといふ考えであった。これに対して山県有朋を中心とする強硬派は、

ロシアの東方侵略には断固として対処し、この抑圧策としてイギリスと同盟関係を結び、東西からロシアを牽制する（けんせい）という考えであった。

桂内閣は総理の桂以下、山県派の閣僚が多く、実質的に山県傀儡（かいらい）政権に近く、小村もまた日英同盟の熱心な推進者であった。

このように、幕末以来、日本が終始ロシアの動静に神経をとがらせてきたのは、ロシアが千島、樺太などと接する巨大な国であるとともに、その伝統的な「東方進出政策」に対する警戒感があったからである。

すなわち、ロシア人のアムール河（黒龍江）方向への進出はすでに十七世紀からはじまり、十九世紀初頭には東シベリア総督府を設立し、一八五八年（安政五年）、清国とのあいだに「愛琿（あいこん）条約」を結び、ロシアはここに黒龍江省を設置した。さらに一八六〇年（万延元年）、英仏両軍が北京を攻撃するや、ロシアは清国と英仏の仲介に立ち、その代償として沿海州を獲得、ウラジオストクの町を建設した。このウラジオストクはロシア語で「東方への到達」の意味で、ロシアの長年の宿願が達成されたのである。ロシア政府はただちにここに港湾を築いて軍港とし、日本海からはるかオホーツク海を睨む要点を得た。

一方、日本に対しては一八五四年（安政元年）、プチャーチンを代表として送り、千島に関してエトロフ、ウルップ両島を国境とし、樺太を両国の雑居地とする内容の日露和親条約を結んだ。次いで一八七五年（明治八年）、樺太と千島の交換条約が成り、ついに樺太全島を自国の領有とすることに成功した。さらに一八九一年（明治二十四年）、ロシアは東方へ直通するシベリア鉄道を

起工し、その東方進出はいっそう加速度を増した。

明治二十八年、日清戦争で日本は勝利をおさめたが、露、仏、独の三国干渉により、遼東半島を還付させられた。この干渉の中心をなしたのはロシアであった。この干渉でロシアは自らの血を流さず東支那鉄道敷設権を獲得、さらに遼東半島を租借して、南満州鉄道の敷設権も得た。とくに遼東半島の租借は旅順という不凍港を得、ここにロシア艦船を常置することが可能となり、日本は大きな脅威を受けるにいたった。

これ以来、日本の対露感情は急速に悪化し、国内では「臥薪嘗胆^{がしんしょうたん}」という言葉が流行^{はや}り、「ロシア憎し」の思いが国民のあいだに広まった。

だがその後もロシアの東方侵略はやまず、北清事変後、各国の軍隊が引揚げたのに露軍のみ満州にとどまり、清国暴徒の北進を機に、鉄道保護のためという名目でさらに大量の軍隊を満州に投入した。暴徒は鎮圧されたが、以後、ロシアは東支那鉄道沿線に軍隊を配備し、さらにその地域を東三省全域にまで広げ、実質的に武力で満州を占領する形となった。

このあたりのやり口は、のち日本が朝鮮や満州を侵略した方法と変わらず、臥薪嘗胆^{がしんしょうたん}といいがら、日本がロシアを反面教師とするという皮肉な結果となった。

満州全域を勢力下におさめたロシアに脅威を抱いた日本政府は、この牽制策としてイギリスと接近し、明治三十五年（一九〇二年）一月、日英同盟を締結した。この内容は、冒頭に支那、朝鮮の領土保全を謳^{うた}い、日英両国いづれかが開戦の場合、同盟国は中立を守り、二国以上と交戦する場合は同盟国は必ず参戦するというものだった。それまで孤立主義を守っていたイギリスにとつ

てこの同盟は初めての試みであり、また白人種国が東洋の有色人種国と対等な関係で同盟を結んだということ、画期的なものであった。

日英同盟で日本とイギリスは急速に親密さを増したが、それはとりもなおさず、ロシアの脅威が両国の身近に迫っていることの証左でもあった。

この間、清国とロシアのあいだでは、満州の還付に当って数次の折衝が重ねられ、明治三十五年四月、ようやく「還付条約」が締結された。その内容は、明治三十五年十月八日までに露国軍隊は盛京省南部遼河に至る地方から撤退し、三十六年四月八日までは盛京省残部および吉林省の軍隊を撤退する。また同年十月までに黒龍江所在の軍隊を撤退する、という三項目から成っていた。このなかで日本が最も関心を抱いたのは、第二項の吉林省からの撤退であった。これが完全になされなければロシアの脅威は去らない。

日本政府はこの条約の推移を見守りながら、さらにイギリス、アメリカとの提携を強めていったが、この外交の中心的役割をはたしたのが、ときの外相小村寿太郎であった。

日清戦争に勝ったとはいえまだ東洋の小国にすぎなかった日本を、先進国と対等の同盟国とし、さらにロシア牽制策としてイギリス、アメリカと接近する方策は、近代日本の最も優れた外交の一つであった。

だが露国軍隊の満州よりの撤兵は容易にすまず、それどころかあらたに清国に対し七カ条の要求を提出し、明治三十六年五月にいたるや突如、鴨緑江下流の龍岩浦を占領した。

この急電が内田清国公使から日本政府にもたらされた四月十九日は、明治天皇以下、政府、軍

首腦のほとんどは、海軍大演習に続く神戸の観艦式出席のため、京都ないし大阪に宿泊していた。小村もこの電報を大阪で受信した。内田公使の電報は七カ条提案を伝えるとともに、露骨な武力介入を告げ、日本の朝鮮における既得権の危機を訴える警告電文でもあった。

たまたまこのとき大阪では第五回内国勸業博覧会が開かれていたが、警電を受けた翌々日、伊藤博文、山県有朋、桂首相、小村外相の四重臣は京都の山県別邸「無隣庵」に集り、至急善後策を協議した。これがいわゆる「無隣庵会談」である。

この席上、桂は次のような対策を提出したが、これは実質的に小村の腹案であった。すなわち、一、ロシアが満州還付条約を履行せず満州から撤兵しないときは、わが日本政府がロシアに直接抗議すること。二、朝鮮については日本の優先権をロシアに確認させ、一步もロシアに譲歩せざること。三、満州問題についてはロシアの優先権を認め、これを機会に韓国問題を根本的に解決する。

この提案は一見、伊藤博文が唱えていた「満鮮交換論」と交らず、ロシアに対して弱腰風に見えるが、桂と小村は「一步もロシアに譲歩せざること」という一節に深い決意をこめていた。

韓国問題について「一步も退かず」ということはとりもなおさず、いざという場合はロシアと決戦するという他に他ならなかった。いま日本がロシアに抗議したところで、ロシアが素直に朝鮮への介入を断念するとは思えない。一步でも入ってきたら、もはや開戦である。いいかえると、この会談は元老および政府首脳が日露開戦やむなしと決意した重大な会議でもあった。

この二カ月あとの六月二十三日、明治天皇御臨席のもと第一回の御前会議が開かれ、無隣庵会

談の内容を追認するとともに、「場合によっては日露開戦もやむなし」という方針を、陛下も了承された。

いまや日露関係は一触即発の状態であった。このような情勢の下、七月二十八日、いよいよ最後の日露交渉がはじまった。日露交渉の舞台として小村外相はモスクワを望んだが、ロシア側は東京を希望し、ローゼン駐日公使はそのまま全権に任命された。

かくして十月三日、ローゼン全権は小村外相を訪ね、日本政府が提出した六項目に対する返答を手渡した。その内容は、韓国領については一、韓国における日本の自由行動権に対して種々の制限を付すること。二、韓国に対する日本の出兵権に対しては、ロシアに知照すべき条件を付すること。三、韓国領土たりとも軍略上の使用を禁ずること。四、北緯三十九度以北の韓国領を中立地帯とすることの四項目を要求し、清国関係については、一、独立と領土保全の約諾を清国に及ぼさざること。二、清国における機会均等主義を承認しないこと。満州については、一、満州およびその沿岸をもつて、まったく日本の利益範囲外とすること、というものだった。

これを要約すれば、韓国における日本の行動に対してはさまざまな条件を付したうえ、韓国領土の三分の一におよぶ地域を中立地帯とすることを要求し、他方、満州に対しては日本との協定の一切を拒絶するという、きわめて一方的な内容であった。

これを受けた政府首脳は激怒し、ある者は「もはや戦うよりなし」とまで断じたが、小村はこれを宥め、十月十四日、第三回の会談をもった。ここで小村は六項目からなる修正案を提出したが、その骨子は、満州における權益の一部については考慮しても、三十九度線以北の韓国領の中

立地帯化には断じて応じられない、とするものであった。

しかしローゼン全権は先の提案に固執し、「満州においてはいかなる国とも約定を結ばぬ」と突っぱねた。このあと第四回目の会談で小村は、「韓国に關してはいかなる干涉も受入れられない」とする日本の最終案を提示し、ローゼンはこれを受けて本国政府に打電し、訓令を待った。

だがロシヤ政府は訓令を出さず、日本政府の提案を無視したまま六週間が過ぎた。

ロシヤはあきらかに問題解決への意欲を放棄していた。その態度に日本政府首脳は不快感をつのらせたが、十二月十一日、ようやくローゼン全権から日本案に対するロシヤ修正案が渡された。それは一、満州に關する条項はまったく今回の交渉の対象外とし、單に韓国に關することのみとする。二、韓国に關する事項についても、従来の小村・ローゼン間において一応の了承を得たものの一切を否定し、別に日本の行動と權益を制限するという内容であった。

これでは前進どころか後退で、あきらかに事態は前より悪化している。交渉途中にこのような開き直った提案をしてくるところをみると、ロシヤはすでに開戦を覚悟していると判断するよりない。

だが小村はあきらめず、暮もおし詰った十二月二十一日、再度ローゼン全権を外務省に招き、改めて中立地帯を韓国側だけに求めるのは片手落ちであると、日本政府の理のあるところを訴え、再修正案を手渡し、ロシヤ政府の熟慮を要望した。

年が明けた（明治三十七年）一月六日、日本の再修正案に対するロシヤ側の回答が届いたが、韓国については相変らず軍事目的の使用禁止と中立地帯設定の二点を主張し、満州については「特

定区域内において、日本が清国と現行条約の下に獲得した権利、特権を享有することを阻害しない」という条項がくわえられていた。これは一見、ロシア側の譲歩のようにみえて、その実、満州の領土保全についての保障を欠き、韓国の危機を防ぐには程遠い内容であった。

一月十一日、臨時閣議が開かれ、翌十二日、再度の御前会議が開かれ、政府内部には開戦前夜のような緊迫感がみなぎった。

だがここでも小村は、さらにロシアの再考を求めるべく最終修正案を出すことを提議した。このあたり、小村は冷静に耐え難きを耐え、忍びがたきを忍び、ねばり強く交渉打開につとめた。同時にイギリス、アメリカはじめ世界各国へ日本の意のあるところを訴え、国際的な配慮も忘れなかった。この小村の努力がなければ、あるいは日露戦争はより早まり、また国際輿論も悪化し、その後の戦況や日本の国際的評価に大きな狂いが生じたかもしれない。

ともかく小村は最終のさらに最終案をモスクワの栗野公使に送り、この口上書をロシア政府に提出したあとは本国からの訓令のないかぎり、みだりに督促してはならないと釘をさした。同時にロシア政府および軍の動静を監視し、異変あれば直ちに連絡するよう命じた。

最後の訓電を送ったところで小村はすでに開戦を覚悟していた。いままでのロシア政府の態度からみてすぐに返答がくるとは思えないし、きたところで満足できる内容は期待できそうもない。

だが小村はなお一縷の望み^{いちる}を託していた。外交交渉において、あきらめはいくら遅くても遅すぎることはない。いかなる理由があろうと、戦争は避けるにこしたことはない。すべてを尽したあと、小村はひたすら静かに返答のくるのを待っていた。

一般国民はすでに「ロシヤ撃つべし」の気概に燃え、日に日に参戦気分は燃え上っていたが、政府内部にはなお開戦に躊躇する者もいた。その最大の理由は彼我の国力の違いであった。日清戦争に勝って意気拳るとはいえ、明治維新を経てまだ三十余年しか経っていない。それまで鎖国をし、東洋の一島国に過ぎなかった小国が、ヨーロッパ最強といわれる露軍とはたして戦えるのか。結戦はともかく、長引けば劣勢におちこむことは目に見えている。

むろん日露交渉のあいだ、戦争に対する準備は着々とすすめられていた。交渉が最終段階に入つた十二月二十八日、政府は臨時国会を開き、緊急支出の勅令をはじめ、戦時大本営条令、軍事参議院条例、京釜鉄道速成令、台湾居住人に対する戦時召集令などが可決され、公布された。またアルゼンチン所有の巡洋艦二隻の購入契約もまとまり、「日進」「春日」と命名された。

さらに年が明けた一月十四日、野津道貫、奥保鞏両陸軍大将、井上良馨海軍大將らが軍事参議院に補せられ、山県有朋、大山巖両元帥、山本権兵衛海軍大臣、寺内正毅陸軍大臣、伊東祐亨軍令部長らにより、新たに軍事参議院が構成された。

まさに風雲急、いつ戦争が勃発してもおかしくない情勢であった。

だがこのとき、乃木希典は一人那須野にいた。相変らず晴耕雨読の生活を続けていたが、那須の田舎にも事態の切迫は刻々と伝わってきた。

この国家存亡の危機にお国のお役に立てなくて、なんの武人であろうか。気持だけは焦るが、退役の身では積極的に動くわけにもいかない。

たまりかねた希典は、九月に親友の児玉源太郎に宛てて次のような詩を送った。

意気天地ヲ震ハシ

精誠鬼神モ感ズ

名利糞土ノ如ク

報国尽忠ノ人

この詩は表面、児玉のことを讃えて詠んだことになっているが、その裏には、自分も貴兄と同じ忠君の気持だから忘れないでくれ、という意味もこめられていた。希典にとっては、もし戦争がはじまったとき、このまま田舎に残ったまま見捨てられるのは忍びがたい。

さらにこのあと、那須野から石黒忠意男爵ただのりに宛てて次のような歌を送っている。

埋れ木の花さく身にはあらねども

高麗もろこしの春ぞ待たるる

これに対し、石黒は返歌として次のような歌を送っている。

埋れ木にさくは桜の花ならで

こまもろこしの雪にぞありけり